

ステージ

stage

古代末から中世にかけての南古代末から中世にかけての南

遺跡が数多く発見され、下市之瀬にある万年前、旧石器時代のことです。市之瀬台地の上からは、彼らの使った黒をが見られるようになるのは、早くもが見られるようになるのは、早くもが見られるようになるのは、早くもが見られるようになるのは、早くもが見られるようになるのは、早くもが見られるようになるのは、早くもが見られるようになるのは、早くも

要文化財となっています。発見された土器や土偶は、現在国の重る「鋳物師屋(いもじや)遺跡」から

でぎね)」が出土し、ここが早くからてぎね)」が出土し、ここが早くからたらされると、谷筋などで栽培が試されるとともに、まもなく御勅使川(みれるとともに、まもなく御勅使川(みたいがわ)扇状地の末端の遺跡群)。 田島の「油田遺跡」からは、水田耕作に関わるものとしては山梨県で発見されている最古の農具である「竪杵(たっきね)」が出土し、ここが早くからてぎね)」が出土し、ここが早くからてぎね)」が出土し、ここが早くからてぎね)」が出土し、ここが早くからない。

和ました。

和作に適した土地であったことがわか

和作に適した土地であったことがわか

和作に適した土地であったことがわか

進んだことが明らかにされています。 が施工され、新たな農業基盤の整備が 色濃く残る「条里型の土地割り (※). が続けられ、近年の発掘調査の成果か 使川扇状地末端の湧水線の下流域で が置かれ開発が進みました。一方御勅 段として、後に「八田牧(はったのまき) すべく、このような土地に適応した手 代になると新たなフロンティアを開拓 と呼ばれる大規模な牛馬の飼育施設 御勅使川扇状地の扇央地域も、平安時 とがほとんど見ることができなかった とから、それまで人々の足跡を見るこ われながらも水田開発へのアプローチ 的基盤を背景に、平安時代末から鎌 このような扇状地の開発に伴う経済 一方、広大なかんばつ地帯であるこ 弥生時代以降度重なる水害に見舞 おそらくこの頃には現在も地域に

> たらにはれてまならないりな、こり給地である「八田牧」が控えます。 条里地割の中にあり、後背には馬の供善寺)は、新たに農業の整備が進んだえたとされる場所(現在の加賀美山法市域にまず足跡を残した遠光が居を構

することができます。 氏の経済基盤を支えた要素のひとつと ひ国」で合ったことが明らかにされて かっています。近年「甲斐国」は「交 内交流の拠点であり続けたことがわ 原始・古代を通じて地域間交流、地域 かれていることに象徴されるように、 のぼる「十日市 (市指定史跡)」が開 とです。現在もその起源が中世にさか の氾濫原との地形的境界でもあったこ 地域は、富士川を登ってきた文化の到 いますが、南アルプス市周辺はまさに 濃を結ぶ結節点であり、扇状地と下流 達点として、歴史的に見ても駿河、信 「交ひの場所」であり、かれら甲斐源 さらに忘れてはならないのは、この

きたともいえるのです。
は全国に飛躍していくことがでたからこそ彼らやその子孫たちり、このような歴史舞台があっ重厚な南アルプス市の歴史があっ重のでは、このような歴史がらいのような歴の背景には、このような

大師などに色濃く残る。現在の藤田、加賀美、田島、鮎沢、古市場、清水、現在の藤田、加賀美、田島、鮎沢、古市場、清水、※一町(約一〇〇m)四方の碁盤の目状の土地区画、

配して勢力を固めました。南アルプス

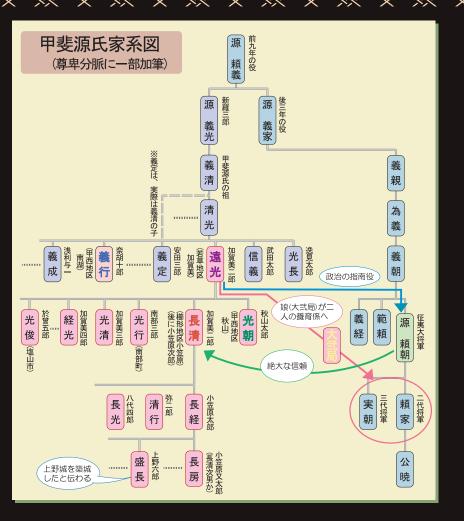
山光朝」、「小笠原長清」らを周辺に

が市内に拠点を構え、その子「秋倉時代には甲斐源氏「加賀美遠光」



における義清の子、清光の濫行に対すたのは、大治五年(一一三〇)、それを源氏の祖は、清和源氏の嫡流八幡太郎は甲斐国に初めて土着し、実質的に甲は甲斐国に初めて土着し、実質的に甲は甲斐国に初めて土着し、実質的に甲司補任の可能性は極めて低く、現在で連たのは、大治五年(一一三〇)、それたのは、大治五年(一一三〇)、それたのは、大治五年(一一三〇)、それを別点としていた常を関係が表表。

配してその基盤を固め、源平合戦、いまで、現在の北杜市)の地に移しつつ、馬を飼育する「牧」が発達してきた逸中。の子清光は、拠点を古代から中央市、西八代郡市川三郷町周辺)でした。その子清光は、拠点を古代から中央市、西八代郡市川三郷町周辺)でした。その子清光は、拠点を古代から中央市、西八代郡市川三郷町周辺)でした。その子どもたちを甲斐国に移され、る常陸国司の訴えです。これにより義



三勢力が割拠しました。きく武田、加賀美、安田を中心とした斐国は、清光の子孫たちの中でも、大わゆる治承・寿永の内乱の頃には、甲

ところで、「甲斐の黒駒」で知られるように、甲斐国は、先に述べた「八るように、甲斐国は、先に述べた「八田牧」以前、古代から朝廷の「御牧」が置かれ、良質な馬の産地として知られており、これが甲斐源氏の強力な武芸や軍事力を支えたことが指摘されて、日の嫡流が没落する中、甲斐源氏は勢に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府に治承・寿永の内乱期以降、鎌倉幕府の成立を軍事面や政治面で支えていくことになるのです。

も知ることができます。 化を図ったことの現われといえます。 どして失脚する一方、加賀美遠光、 において重要な位置を占めたことから 介錯人(養育係)となって、幕府後宮 朝のもとに出仕して大弐局と呼ばれ、 信任が厚かったことは、遠光の娘が頼 員となっていきました。遠光や長清の と呼ばれる鎌倉幕府の有力御家人の 父子の子孫たちは、その後「鎌倉中_ 武力を警戒した頼朝がその分断、弱体 を利用しつつも、その団結力と優れた この相反する対応は、甲斐源氏の能力 ようになります。同じ一族に対しての、 頼朝に信頼され、幕府の中枢を占める 笠原長清の父子や石和(武田)信光は 義、そして秋山光朝らが殺害されるな えられていく過程で安田義定、武田信 一代将軍頼家、次いで三代将軍実朝の 頼朝の信任を得た信光や遠光、長清

roots

でもありました。鎌倉幕府の基盤が整される一方で、その力を警戒する存在



キャスト

Cast



甲斐源氏、加賀美遠光は、康治二年 富士川流域に勢力を持ちました。 美の地を拠点として甲府盆地西部から れたとされ、現在の南アルプス市加賀 一一四三)源清光の三男として生ま 南アルプス市に初めて足跡を残した

ができます。なお、この時併せて「王」 られます。遠光の長男光朝、次男長清 る「三階菱♣」は、この「王」の字 京都とのつながりをうかがい知ること 逸話から、遠光自身の上京の可能性や は共に実際に在京して平家に仕えてお の大聖寺の地に安置されたものと伝え 王坐像(重文)」は、承安元年(一一七一 を図案化したものと伝えられます。 の字も勅許され、加賀美一族の紋であ 天皇から下賜され、京からの帰路現在 に宮中守護の功績により、遠光が高倉 身延町にある大聖寺の本尊「不動明 真偽の程はともかく、このような

> ら他の甲斐源氏に比して、治承・寿永 のと見られます。その後も『吾妻鏡』 その基盤を確かなものとしていったも 鎌倉の頼朝と良好な関係を築くことで の内乱期に目立った活躍は伝えられて 占めていたことがわかります。 るなど、一時期鎌倉幕府中枢の一角を を頼朝の嫡男の養育係として出仕させ に頼朝の近侍者として度々登場し、 濃守に任じられていることなどから、 年 (一一八五)、頼朝の推挙により信 いません。しかし平家滅亡後の文治元 維持しながらも、同時期に活躍した彼

とともに祀られた秋山の光昌寺の五輪 光大明神)があるほか、光朝、同夫人 墓所、供養塔として、館跡と伝えられ 寺の五輪塔などが知られています。 塔、遠光開基と伝えられる甲府市遠光 る加賀美の法善寺の南に廟所(通称遠 たは、元仁元年(一二二四)といわれ、 その没年は寛喜二年(一二三〇)ま



に、甲斐国内に確固たる基盤と勢力を

遠光は、武田信義や安田義定と同様

動向や没年などはわかっていません。

所知など奉るべきには及ばぬ人」と厳 心不善につかいたりし人にて候えば、 朝は)平家に付き、又木曽に付きて

しく評されています。この後の光朝の



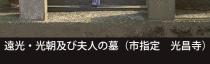
ど、平氏政権の一翼を担っていたと考 を構え、「秋山」の姓を名乗ったとさ 承四年(一一八〇)の頼朝挙兵時に長 嫡男重盛の娘を娶ったと伝えられるな 後世の史料の『甲斐国志』では清盛の れ、成長して南アルプス市秋山に拠点 えられます。こうした状況からか、治 京で平清盛の四男知盛に仕えており 寿永の内乱以前は、弟の長清とともに れます。『吾妻鏡』によれば、治承 光朝は加賀美遠光の長子として生ま

> かな足跡を刻んでいったのです。 甲斐国内では下山氏や常葉氏を輩出 筋は途絶えることなく、光朝の子孫は と伝えられています。しかし秋山の血 められ、西山にある雨鳴城で自害した し、国外でも讃岐へ広がり、歴史に確 地域の伝承では、光朝は鎌倉勢に攻



が後に頼朝から疎まれる要因となった たのに対し、光朝は京に留まり、これ 清が比較的早く京を離れ頼朝と合流し

に頼朝が弟範頼に出した手紙には「(光 とも言われます。文治元年(一一八五)



地域の人々から厚く信仰されていま と伝えられる五輪塔もあり、現在でも の境内には、遠光・光朝・同夫人の墓 の木像がともに安置されています。そ

朝を祀った廟所があり、父遠光と光朝

には光朝開基と伝えられる光昌寺と光 館を構えたとされる熊野神社やその南 遺跡や史跡が点在しています。光朝が 秋山周辺には、光朝伝承と結びついた

とはなかった光朝ですが、拠点とした



るよう手紙を送っています。

しく・・・(中略)ただ二郎殿(長清)

をいとおしくて。これをはぐくみ候べ

きなり」と長清に対し特別に目をかけ

洧には多聞天の寄進を割り当てている

さらに、東大寺の再建にかかり、

加賀美遠光、

小笠原氏の始祖。

加賀美遠光の次男として応保二年 一一六二)三月五日に生まれ、母は

小笠原)を本拠とし、小笠原長清と称 和田義盛の娘とも三浦義澄の娘ともい しました。 われます。原小笠原荘(南アルプス市

館を構えたと考えられています。 という地名の残る小笠原小学校付近に 「御所庭(ごしょのにわ)」や「的場」

はいち早く呼応しています。 が、平氏追討の令旨には加賀美一族で 平知盛に家礼として出仕していました 兄である秋山光朝とともに在京し、

広常の娘と結婚し、また、文治元年 の声かけにより有力御家人の上総介 ます。治承五年(一一八一)には頼朝 の配下にいる際には、頼朝が範頼に宛 建に活躍し、源頼朝の絶大な信頼を得 て「かがみ殿(長清)、ことにいとお | | 八五)、平家討伐で頼朝の弟範頼 長清は父遠光とともに鎌倉幕府の創

な行事に多く関わっていたことがうか など、『吾妻鏡』からは、頼朝の身近

かけに、小笠原氏は信濃へと進出し基 佐久伴野荘の地頭となったことをきっ 父遠光の信濃守着任に続き、長清が

田信光などとともに「弓馬の四天 小笠原家に受け継がれていくこととな また、長清以降、弓馬術の伝統は代々 許可された二二名に選ばれています。 野ほかで巻狩をした際に弓箭の所持を 王」に数えられたとされ、建久四年 長清は弓馬の術に優れており、 一九三)には、頼朝が下野国那須

府の軍勢を率いて上洛した後、長清は 京都に生活の基盤を置きます。 に東山道大将軍として活躍し、鎌倉幕 承久の乱において、武田信光ととも

が描かれていることがわかります。 建てた長清寺に葬られたといわれ、応 仁期の地図には、信光寺と並び長清寺 仁治三年(一二四二)七月一五日 一歳で逝去し、京都の清水坂に自ら

> 兵となるなど、供奉人として計七回そ の頼朝の東大寺供養、天王寺参りの随 の行列をはじめ、建久六年(一一九五 ます。八条院の蔵人(くろうど)で 光の子で、加賀美遠光の弟にあたり 荘に拠って名字の地としました。 の名を見つけることができます。奈胡 または奈胡蔵人義行とみえ、文治元年 あったので、『吾妻鏡』には奈胡蔵人 一一八五)、勝長寿院供養の源頼朝 奈胡十郎義行は、系図によれば源清

源氏の一流が拠って立つだけの基盤が かった南湖地区ですが、かつては甲斐 らかではありませんが、墓地について ここにあったことがわかります。 てられました。釜無川の水害の絶えな になって地域の人々によって墓碑が立 ことが伝えられます。ここには、近代 あり、現在の東南湖字十郎木にあった は、『甲斐国志』に「東南湖二十郎樹 ト伝フ処ソノ墓所ナリト云ヒ伝フ」と その生涯や屋敷地などは必ずしも明

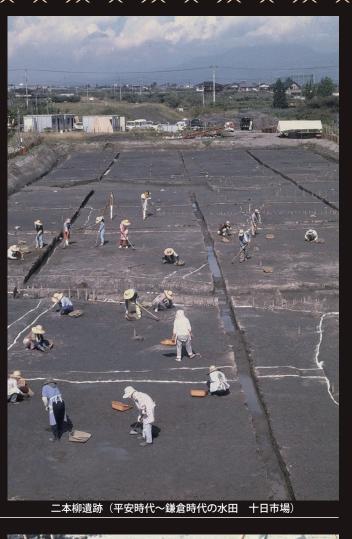


当時七歳であった頼朝の嫡男万寿(後 転じています。 が生まれると、今度は千幡の養育係に 頼朝に次男千幡(後の三代将軍実朝) した。その後建久三年(一一九二)に に拝謁し「大弐局」の名を与えられま 加賀美遠光の娘です。出仕に際し頼朝 として頼朝のもとに出仕した女性で の二代将軍頼家)の介錯人(養育係) 大弐局は、文治四年(一一八八)、

となり、彼女の鎌倉における力を知る て造られた可能性が高いことが明らか この時、この像が大弐局の発願によっ め、後に重要文化財に指定されました。 明王像」が発見され大きな話題をあつ 頭である光明院から運慶作の「大威徳 任の厚さを物語るものといえます。 における頼朝の加賀美一族に対する信 錯人として選ばれたことは、この時点 平成一九年、神奈川県の称名寺の塔 このように頼朝の長男及び次男の介

ことができる発見ともなりました。

ックグラウンド



末端の遺跡群

弧状の湧水線を形成して、その下流が 状地を形成してきました。その旺盛な 伏流した水は扇端部に湧出し、そこに 部には砂礫が厚く堆積し、水の恵み薄 に砂礫を運び、いく筋にも重複した扇 の流れは急峻な山肌を削って盆地底部 て甲府盆地底部に集まってきます。そ 土砂の運搬力によって、扇状地の中央 い干ばつ地帯となった一方、扇状地を 周囲を高い山々に囲まれた山梨県で 降った雨はいくつもの河川となっ

> 不安定で、ともすると牙をむく河川か 開発の中心となっていきました。 相対的に安定した土地としてその後の 灌漑しうる扇状地下半部の微高地が、 を源とする湧水であり、これによって らの引水ではなく、このような伏流水 ひとつとなりました。選択されたのは 甲府盆地の南部、つまり釜無川扇状

地や御勅使川扇状地の下半部では近 過去のものとなっています。 地域=無住というイメージは、確実に くの遺跡が発見され、いまや常習洪水 査によって、このような場所から数多 年、大規模な道路建設に先立つ発掘調

> 強く推進されたとみられますが、発掘 園制の拡大という社会的機運を背景に

中村遺跡、二本柳遺跡などでは、現地 南アルプス市の南部に位置する宮沢

富む地域の中心に、加賀美遠光の館跡 なっています。このような開発機運に

本県への稲作伝播後のフロンティアの

ら鎌倉時代とみられる水田を中心に 祭祀の場があわせて見つかりました。 初め頃の水田域の広がる中に建物跡や かり、大師東丹保遺跡では、鎌倉時代 杭や網代を用いた護岸施設などが見つ この時期の開発は、律令制の崩壊と荘 表下最大四mもの深さから、古代末か

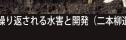
とされる法善寺は立地するのです。

安定的な利用を前提とした開発が行わ ぎる地域でもあったのです ように続く、新たな時代への活力みな 斐源氏がまず足跡を残した地は、 できます。甲府盆地西部において、甲 続けた先人のエネルギーを見ることが て常に機を窺い、そこにアプローチし い旺盛な開発への活力、自然と対話し れら遺跡群は教えてくれています。 それが平坦な道でなかったことを、 にしたのは豊かな湧水でした。しかし、 あったのです。どの時代も開発を可能 れた地はまた、水に脅かされる地でも 時代の遺跡が眠っています。水に恵ま 厚い砂礫の層を挟んで平安時代や弥牛 場合、洪水や土石流によって運ばれた のサイクルを見ることができます。例 試みられるという数百年~千年スパン 流失した後、安定を待ってまた開発が れ、それが不安定な河川の営為により えば鎌倉時代の水田の下には、多くの 我々はそこに、時代を超えて衰えた 連の発掘調査からはまた、湧水の



うになり、鎌倉時代以降これが安定的 層に残る条里型の地割りが見られるよ 時代前半(一〇世紀)から、現在も表 調査からは、この地域においては平安

に認められるようになることも明かに



御勅使

状地の開発状況が明らかとなってきま |間の調査で状況は一変し、御勅使川扇 う発掘調査を契機として、この二〇年 まり住んでいない地域と考えられてき 郷に比定され、その中心地域と考えら 地域は、平安時代中期にまとめられた ました。しかし、中部横断道建設に伴 たことから遺跡の発見が遅れ、人があ 北部に広がる御勅使川扇状地は、御勅 使川の洪水によって厚く砂礫が堆積し れてきました。一方、南アルプス市中 『和妙類聚抄』に見られる巨麻郡大井 南アルプス市下宮地の神部神社周辺

頃以降、集落は縮小され窯業も停止さ されたと考えられています。九世紀中 この地域が須恵器の生産地として開発 ら、周辺で窯業が行われたと推察され、 の中に不良品も含まれていることか た須恵器の甕片が大量に発見され、そ 水を利用し、八世紀には集落が形成さ では湧水や御勅使川の旧流路・支流の 良・平安時代に進められます。扇端部 れました。中でも野牛島地区の野牛島・ 西ノ久保遺跡では小谷から細かく割れ 御勅使川扇状地の本格的な開発は奈 一〇世紀後半以降の炭窯が

> 発見されていることから、平安時代の 後期には炭の生産地となったことが分

> > の銘文から、「八田牧」と呼ばれる私

御牧北鷹尾」天福元年(一二三三) 神社の御正体に刻まれた「甲斐国八田 ことが明らかとなりました。高尾穂見 が発見され、牧を管理する集落である 部に位置する百々遺跡の調査の結果 を飼育する「牧」の開拓でした。扇央 に乏しい扇央部への開発が始まりま ○○個体を超えるウシ・ウマの獣骨 平安時代九世紀に入ると、水資源 その開発の主な目的はウシ・ウマ









ら中世にかけて、扇状地全体が「八田 牧が高尾の立地する櫛形山東麓周辺に 牧」と密接に関係していたと言えるで でウマの骨が発見されており、古代か 原・天神遺跡、野牛島・西ノ久保遺跡 百々遺跡の他にも坂ノ上姥神遺跡や榎 めて具体的な証拠が得られたのです。 したが、百々遺跡の発見によって初 あったことは古くから想定されていま

や灰釉陶器など甲斐国外の生産品を入 れたと考えられます。 もった有力者層によって開発が進めら は、中央の皇族や甲斐国司と繋がりを ました。このことから、扇状地扇央部 稜鏡やさまざまな奢侈品を所有してい 手できる広いネットワークを持ち、ハ ていたことも推測されています。その 業生産を管理・統括した階層が居住し がける手工業集団とともに、牧と手工 の出土遺物から、鍛冶や繊維などを手 されていました。その区画された内部 人々は奈良三彩や青・白磁、緑釉陶器 百々遺跡の集落内部は溝や柵で区画

氏が鎌倉幕府の有力御家人となる礎と 体の開発は、後の甲斐源氏の経済的 軍事的基盤となり、加賀美氏や小笠原 手工業生産や牧を中心とした扇状地全

奈良時代から進められたさまざまな



高尾穂見神社御正体





もなったのです。



館跡と城

の館であった現在の地に移されたもの の後遠光の孫である遠経によって遠光 ば遠光によって自らの勢力下にある山 の地に開かれた真言宗(当初は法相 と伝えられています。 寺(南アルプス市山寺)に移され、そ 宗)の古刹法善寺は、寺の由緒によれ 大同元年(八〇六)武田(韮崎市)

ら開発が進められてきた御勅使川扇状 遠光が居を構えたこの地は、古代か



弘法大師ゆかりの伝説をもちますが 寺境内にも扇状地の伏流水を水源とす 地末端の湧水線上にあり、現在の法善 いることがうかがえます。 はこの湧水を取り込む形で設けられて 地を潤し続けてきたものと思われ、 もたらす神聖な湧水として、流下の耕 おそらくは弥生時代以来、地域に恵を 水は真言宗寺院である法善寺らしく る島池という湧水があります。この湧

ら、平安時代以降の農業基盤整備の所 に臨み、生産、軍事、経済の要衝とし 駿信往還が立地するなど、流通の拠点 「十日市」が開かれる十日市場や後の また、滝沢川を隔てた西側には現在も 施設であった「八田牧」がありました。 く残り、後背の扇状地上には馬の飼育 産と推定される条里型の地割りが色濃 て、絶好の立地を占めていたことがわ 周囲には、近年の発掘調査の成果か

体が堀と土塁で囲まれていたことがわ いたという記録もあり、往古はその全 時代には、北側に「築地堀」が残って がいまだによく残されています。江戸 れる高みがわずかに残るのみとなって 通り、南辺と東辺に土塁の痕跡と思わ いますが、中世の館跡としての雰囲気 現在は、寺域の南面、西面に水路が

chateaus & castles

中野城、雨鳴城といった山城の遺構が 望することができます。三方を崖に囲 はすばらしく、富士川流域を眼下に 館跡と伝えられています。現地の眺望 に接続していて、その後背の山地には まれたこの小丘は、一方で後背の山地 神社が祀られており、この地が光朝の 尾根沿いに連なります。これら山城に ついては現在、中野城は南北朝時代以 秋山地区集落の山よりの小丘に熊野



能性が指摘されていますが、地域では 降に、雨鳴城は戦国時代に造られた可 永く光朝の要害と伝承されてきた遺構

県の指定文化財となっています。 である光経が一族の安寧を祈って埋納 られています。その銘文から光朝の弟 銘を持つ経筒が発見されたことでも知 その境内から建久八年(一一九七)の したものであることがわかり、現在は なお秋山の熊野神社は、江戸時代に

化財)がのこされています。 らには光朝、同夫人ならびに遠光の墓 と伝えられる三基の五輪塔(市指定文 る光昌寺や光朝の廟所があり、その傍 この他周辺には、光朝開基といわれ



子弘次郎長秀

られた屋敷神の「乾天神」だと考え

天神社が出土し、館の戌亥の方角に祀

大正時代、小笠原小学校の敷地から

名字の地「原小笠原荘」

查所

場」の地名の残る小笠原小学校付近に あります。 館を構えたとされています。『甲斐国 も ナリ相伝フ小笠原長清居宅ノ南庭」と 西ニ在リ松樹鬱蒼方四十間許リノ間地 志』には「御所ノ庭」について「村ノ 長清の本拠は原小笠原荘とされ、 「御所庭(ごしょのにわ)」や「的

然的に「原小笠原荘」は南アルプス市 郷が北杜市浅尾を指すと考えられ、 明野村)にもあり、中世の古文書にも を指すと考えられます。 内朝尾郷」と記される史料から、朝尾 の小笠原が登場します。「山小笠原荘 「山小笠原荘」「原小笠原荘」とふたつ 「小笠原」という地名は北杜市(旧

らの所領の相続を認めた文書といえま 基自筆譲状」は長基が嫡子長秀らに自 永徳三年(一三八三)の「小笠原長



小笠原小学校校舎のレリ

かがえます。

長清ゆかりの地

地がいくつか伝承されています。

市内小笠原周辺には長清に関連する

等所讓与長秀也不可有他好所领內 右所领者相制所下文并代、千後證 后度付信第五用大小公門 告将可念 用文九可譲の敢不可讓他人仍必像 知行之不可遠礼煩彼等言男子者 长秀和行着长秀之男子看全多 的軍所讓船件 永德三年二月十百 清频 程清领長考"線 日國國連直派 甲发國原小皇奈庄多城 同國八代成知行分等是沒是前 同國國國都一新大九新 同國石田亦 上海海水等保藏治國路側衛門等 同國絕鄉 同國程底部 共門養鄉智 同國浅面 反國宫原村 京都倉北大 信漆國伊賀良法 信漢國小邊山外去見充罪隆與國石河出

(東京大学史料編纂所蔵

勝山小笠原文書)

す。小笠原氏顕彰のシンボルともいえ で、平成十四年に修復が行われていま あった若宮神社の社殿を移築したもの 棺が出土したことによって下宮地に 明治二四年頃のこと、開墾した際に石 長清公祠堂(しどう)」が建っています あったとされ、現在その地に「小笠原 角にも「小笠原殿ノ墓ト伝フ」古墓が されたと伝わります。市内下宮地の 野県開善寺、同長清寺の三箇所に分骨 で焼失したことで、岐阜県荘福寺、 観音殿に埋葬されましたが、応仁の乱

場」の地名の残る「笠屋神社」の境内 児童の学問の神様「御所天神」として 改めて祀ったようです。現在では「的 へと移築されています。

小笠原長基自筆譲状 また、長清は、現在の山寺の地に

のものとされる仏像群、国重要文化財 の地名はこの寺から始まったといわれ の菩提のために創建したといい、 源寺」(現存せず)というお寺を源氏 ています。 「木造大日如来及四波羅蜜菩薩坐像」 同じく山寺には、加賀美遠光の時期

のある宝珠寺があり、曹源寺や、 や小笠原長清ゆかりの「毘沙門天立像」 美の法善寺(前ページ上段参照)との

小笠原殿ノ墓ト伝フ

関連が示唆されます。

犬丸(政康)などへ十九もの所領を分

この中で、

長秀をはじめ弟の土用

小笠原長清は京都で没し、長清寺の



る惣領に代々継承されてきたことがう

の「名字の地」として一族の中核であ

と注記されていることから、小笠原家

小笠原荘」を挙げ、さらに「惣領職 割して相続していますが、筆頭に「原



みとめられます まれてきた地盤へ進出してきた様子が 認されており、遠光や長清が連綿と営 から奈良・平安時代の集落跡が多数確 から流れ出る小河川を中心に古墳時代 には安倍清明伝説のある湧水や櫛形山 これら墳墓だけでなく、小笠原周辺

原長清の孫、上野六郎盛長が築いたと いわれます。そ 上野にある椿城(上野城) は、小笠

の場所には現在 が伝わります。 群や本重寺など 秋山家の五輪塔 その後を継いだ 上野家あるいは

椿城跡の五輪塔群

内に広がる曾

3枚目:雁の群れにて 兄弟。



歴史上の人物は、歌舞伎の演目でも有

名な『曾我物語』の主要キャストです

『曾我物語』とは曾我兄弟が父親の仇

の「御所五郎丸」。

地元に伝えられる

芦安地区の「虎御前」と野牛島地区



10 枚目:兄弟は駿河興津で祐経を討

伊東祐親に所領を奪われたことから、 平安時代の末期、伊豆の武士たちの間 の形に落ち着いていったようです。 められ、時代とともに様々なエピソー の成立時期ははっきりしていません。 兄弟は父の仇を討つことを心に固く誓 残された祐泰の子、十郎と五郎の幼き その報復として家来に伊東祐親を襲わ ていました。工藤祐経も従兄に当たる では同族でも所領争いが繰り広げられ ドが加えられながら、江戸時代に現在 鎌倉時代の終わり頃に物語としてまと は将軍を支える重臣となりました。兄 源頼朝が鎌倉幕府を開くと、工藤祐経 と呼ばれることになります。時は移り と再婚したため、二人は「曾我兄弟 い成長していきます。この間に、未亡 妻鏡』にも記録されていますが、 人となった祐泰の妻が相模の曾我祐信 物語の粗筋は次のようなものです。 祐親の子河津祐泰を殺害します。

> り美女の誉れ高い虎御前という恋人が き後、虎御前は出家し、二人の菩提を 五郎の死罪を言い渡しました。兄弟亡 を被って油断させると、後ろから五郎 御所五郎丸は一計を案じ、女性の着物 は、向かってくる武士たちを怪力でな との次第を報告しようと進む弟五郎 討ちとられます。一方、将軍頼朝にこ かし、駆けつけた武士たちに兄十郎は 告げます。建久四年(一一九三)五月 いましたが本懐を遂げるために別れを す。この時、 をやっとのことで取り押さえました。 ぎ倒していきました。頼朝を警護する 工藤祐経を討ち果たしたのでした。し 一十八日、ついに曾我兄弟は父親の敵 将軍頼朝の面前で五郎の尋問が 祐経の遺児に請われた頼朝は 十郎には大磯の遊女であ

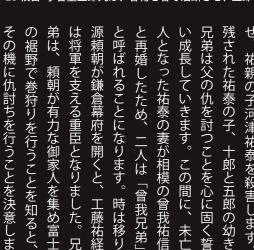
の一つに挙げられます。仇討ちは『吾 浪士の討ち入りに並ぶ日本三大仇討ち を討つ物語です。皆さんご存知の赤穂

悲劇のヒロイン 虎御前

弔う旅に出たと伝えられます。

ます。その旅の途中と参拝後、生まれ の菩提を弔うため信濃善光寺に向かい がその悲しさのあまり尼となり、兄弟 あって大磯にある長者の養女となった 区の伝承では芦安安通の生まれで、縁 する虎御前は、大磯の長者の娘で、後 を聞いた虎御前は、まだ一九歳でした と語られています。大磯で十郎の訃報 女となりました。この虎御前、芦安地 に成長して街道一の美女と言われる遊 曾我兄弟の兄十郎の恋人として登場





頼朝が有力な御家人を集め富士

e tale of the soga



夢 至風

29 枚目:虎御前は兄弟の霊を弔うため、 諸国霊場めぐりの旅に出た。

悲運の武士

御所五郎丸

移された曾我十郎と虎御前と伝えられ

大曽利の諏訪神社には、伊豆神社から

る二体の木像が納められています。

見ることができます。一方、芦安地区

たという「虎御前の鏡立石」

を今でも

くには、虎御前が鏡を立てて化粧をし

供養を続けたといわれています。曾我

故郷の安通村へ立ち寄り、兄弟の追善

氏や虎御前を祀る安通の伊豆神社跡近

「東海道五十三次」で知られる広重

伎や浄瑠璃の演目となり、さらに浮 世絵の題材となるなど庶民の人気を 正月の歌舞伎は「曾我物」 と言われるほどで、五郎丸の役は歴 代の市川左団次や市川九蔵、市川染 2014年の新春歌舞伎でも市 川海老蔵らによって「曾我物」が演



た杖が成長したものだとも伝えられて 菩薩の木像が祀られ、お堂の傍らには には、五郎丸の肌守りと言われる地蔵 れたのだと、地元では伝えられていま が武士にあるまじきと、鎌倉を追放さ らず、女装して油断させたという行為 お堂の前のビャクシンは五郎丸が突い 五郎丸の墓が建てられています。また. **五郎丸ですが、功を上げたにもかかわ** 曾我五郎時致から頼朝を守った御所 現在、野牛島の中心に建つ観音学 南アルプス市の野牛島の地に流さ

られたエピソードなのかもしれませ ん。五郎丸は、今も地元の人々から慕 郎丸が女装したという記述は見当たり われ、毎年七月二三日、野牛島地区の 際立たせるために、女装は後から加え ません。主役である曾我兄弟の活躍を とされる真名本や『吾妻鏡』には、五 ちなみに『曾我物語』の一番古い形

> れています。 人たちによって供養するお祭りが開か

曾我物語の広がり

氏と御所五郎丸の新たな歴史を映しだ クを持つ有力者がいたことが明らかと す手がかりになるかもしれません。 なっています。この鏡は、今後甲斐源 重な副葬品から、広範囲のネットワー 並んで発見され、和鏡という極めて貴 代末の和鏡と刀子を副葬した土坑墓が る地に流されたとの見解をとっていま 国志』では五郎丸が甲斐源氏一条忠頼 あります。五郎丸については、『甲斐 木像を作らせたのではないかとの説も 安を所領していたことから、兄弟の霊 藤氏や河津氏と同族である工藤氏が芦 が知行書なり。」との記述があり、伊 草郷芦倉・奈良田村などは、工藤庄司 については、『異本曾我物語』に「大 跡が芦安と野牛島にあるのか。虎御前 すが、野牛島・西ノ久保遺跡で平安時 す。五郎丸と直接結びつくかは不明で に一時仕えていたため、その領地であ を鎮魂するため、工藤氏が伊豆神社や なぜ曾我物語の登場人物に関わる史

たのでしょうか。 遂げた五郎の姿がどのように写ってい かれています。長清の瞳には仇討ちを た小笠原長清も参列していたことが書 五郎の尋問の際に、幕府の重臣であっ 最後に、『吾妻鏡』には頼朝による



(市指定

御所五郎丸の墓







(市指定 宝珠寺) 木造毘沙門天立像





なむあミたふつと哉 新やうほん 行一人めうしやう りんしやう なむあミたふつと なむあミたふつ ミち行かせ給え かならすり あかうせ るりうせ さんへまつ しやうらう

となったとも考えられます。 したことが長清が本像を造立する契機 の結縁を結ぶことを求めており、こう を造立するにあたっては、その仏像と れば頼朝は、その際各御家人に、 を担当していますが、『吾妻鏡』によ ます。長清は、東大寺の復興造仏の中 原長清が造立に関わったと見られてい 像高二〇一. 七センチの大像です。鎌 で、頼朝の命により多聞天(毘沙門天) 倉時代初期の作例で、遠光の次男小笠 同じ宝珠寺の「毘沙門天立像」は、 信仰の証が数多く残されています。 と伝えられる仏像をはじめ鎌倉時代の す。南アルプス市にも甲斐源氏ゆかり 深く帰依したことはよく知られていま する武士が、後生安楽を願って仏門・ 鎌倉時代、 人を殺めることを宿命と

文化を導入することができる力を持っ せ、その造立に関わった人々が中央の されたものと比べて遜色ない造形を見 指摘されています。京都や奈良で制作 加賀美遠光が造立に関わった可能性が 作とされ、当時この地に勢力を持った ていたことを示唆します。 その中で、宝珠寺の「大日如来及び 🖺 は平安時代末期の

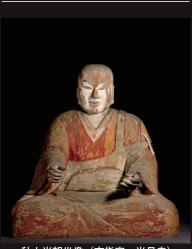
時の人々の阿弥陀如来に託した浄土往 の際取り出された納入文書からは、当 よりやや下る鎌倉時代中頃の作。調査 隆円寺の「阿弥陀如来坐像 はこれ

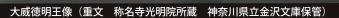


八幡神本地仏鏡像(県指定 法善寺)



加賀美遠光坐像(市指定 光昌寺





半、光朝像は江戸時代の作例です。

が祀られています。遠光像は、遠光像

「加賀美遠光坐像」、「秋山光朝坐像

としては最古の作例である室町時代前

存在となり、例えば秋山の光昌寺には、 敬の対象として、地域の信仰を集める

ス市と鎌倉の歴史舞台を結びつける重 性が極めて高く、彼女の鎌倉での力を 要な発見となりました。 知ることができるとともに、南アルプ 源大弐殿が遠光の娘大弐局である可能 されました。この像を運慶に造らせた らかにされ、のちに重要文化財に指定 納入文書から運慶の作であることが明 刹「称名寺」の塔頭「光明院」で平成 南アルプス市ではなく、神奈川県の名 金沢文庫で保管されている作例です。 九年に発見され、現在は神奈川県立 最後に紹介する「大威徳 明王像」は、 秋山光朝坐像

があり、本像もそのような関わりの中

あることから重要視されたという指摘

での造仏かもしれません。

が源氏の氏神である八幡神の本地仏で 浄土信仰の高まりに加え、阿弥陀如来 た。甲斐源氏の阿弥陀信仰については、

生の切ない願いを知ることができまし

年(一二九〇)の銘を持つ「八幡神・

は、阿弥陀三尊像の形をとり、正応三

遠光の居館跡と伝えられる法善寺に

地仏鏡像」が残されています。

なお、後には彼ら甲斐源氏自身が畏

武士の誇り

全国へ駆ける甲斐源氏

条八幡宮の造営に要する費用を負担し

pride of the samura

た御家人の名前などが記されたもの

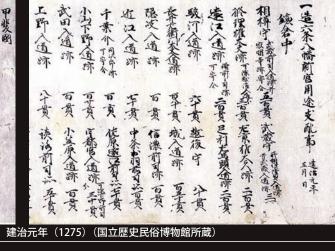
加賀美、秋山、奈古など南アルプ

をうかがい知ることのできる史料があ 鎌倉幕府創建以降の甲斐源氏の様子

鎌倉時代終わり頃の史料で、京都六

の名は「甲斐国」ではなく「鎌倉中

たことがわかります。さらに、小笠原 ス市の甲斐源氏が甲斐国で活躍してい



けられ、鎌倉幕府の主な担い手である 四六九名の御家人の中で十位に位置づ きます。百貫文もの額は、記載された の中に武田とともに見つけることがで

鎌倉中の中でもさらに中心的な位置づ

けであったことがうかがえます。

歴史の表舞台で顔を揃えます。 南北朝

このように小笠原と武田はたびたび

ひとつに下山氏の祖となり、また、 いきます。秋山光朝の子孫も、例えば

南部三市入西部

六黄 秋山太郎郎

逸見入道 济 か見る後人園所

河仙利入通豚 秦石歲人 亦

建治元年(1275)

甲斐源氏の面々は全国へと展開して

東北へ進出し、近世まで北奥の覇者と

て確固たる地位を築くのです。

ます。光朝の弟にあたる南部家もまた 箇所の所領を有するなど活躍していき うひとつには讃岐へ渡り讃岐国内に数

极值入通济

平井沢市所

营林入通 新 何何太郎风茶珠

執泽六郎亦

八岁

枚看板であったといえるのです。 みえるように、甲斐源氏を代表する一 期の史料に「武田・小笠原の者共」と

加賀美・小笠原であるということ 全国へと展開する甲斐源氏の一族は

甲斐源氏の血筋であるということを誇

市何别為人通流

风庄司 派 家扶言即以流 上蘇中粉並次

長江門入通浙 六貫 同八年人通济至由亦七貫

上藤石艺一时次

飯田五郎 流 尼陸江南部

> 化財)」からはその名が示すように南 芸「加賀美流騎馬打毬(青森県指定文 部藩主直伝として受け継がれてきた武 名詞ともいえる弓馬の術に顕著で、南 でゆきます。その様子は甲斐源氏の代 りに、その家風を代々子孫に受け継い 部家の由緒が加賀美にあることを重ん

> 根ざしてゆくこととなります。 やがては現代日本の生活文化の根底に の家伝が加賀美遠光、小笠原長清、そ じる様子が伺えます。また、甲斐源氏 礼法」として世に知られることとなり、 れてゆく中で、武家の作法「小笠原流 して代々小笠原家へと受け継がれ育ま



け継ぐ小倉藩相伝の流鏑馬です。

小笠原流礼法

葉を借りると 礼法の活動を展開されている二派の言 「小笠原流礼法」を、現在小笠原流

常の行動として役に立ち、無駄なく、他 られ、受け継がれてきたもの」であり、「日 から見て美しくある」ものといえます。 「武士が社会生活を円滑にするために作

堪能な家柄として活躍します。 け継ぎ、長清以降小笠原家は「流鏑馬」 など弓馬儀礼の際に名を連ねる弓馬に を代々小笠原家の惣領が一子相伝で受 清和源氏に伝わるとされる伝統であ 「糾方(=弓馬故実または弓法)

将軍家の弓馬故実の指南役および師範 指導的存在となり、小笠原家の故実が 中では少なくとも室町時代の中頃には ますが、史料に乏しく、史料を紐解く 家として定着したといえ、武家社会の にかかる書物の執筆などが示されてい 家などの弓馬師範であったことや礼法 系譜などでは早い段階から代々将軍



小笠原、御所庭付近の 跡などで、古代終わり頃から中世 にかけての「雁股鏃」が出土して います。流鏑馬や狩猟、武士の鍛

錬などで用いるやじりです

相手を大切に思う

こころ

未来

武家に重んじられることとなったとい

小笠原流礼法を大成したのは戦国期の 法に「礼」が加えられて三法からなる 概ね室町期に「弓」・「御(馬)」

濃を離れながらも小笠原家であること 頃といえます。長時は武田家に破れ信 信濃守護であった小笠原長時・貞慶の の基盤が整えられたとされ、

故実を取込んで大成していったとみら として知られる伊勢家や今川家などの に行い、自家の故実に、同じく故実家 を誇りに、故実の集成・伝授を積極的

力家臣にも積極的に伝授したといいま 期には糾方の断絶を避けるために 子相伝」を解き、近親の分流や有 信濃守護であった信濃小笠原家は戦

藩もの大名を輩出する天下の大族とな もつ小倉藩主家や、その他あわせて六 とされる信濃小笠原家で最大の石高を 全国へと展開し、江戸期には、惣領家 小笠原家の活躍の場は京や信濃から

名が庶民に浸透してゆきます。その にも浸透し、さらに明治期以降学校教 も江戸期を通して階層を超え庶民の間 どに伝授したことにより変容しながら 育にも取り入れられ、一層小笠原流の また、小笠原流礼法は分流や近親な

> 解を広めたともいわれています。しか る心を形にあらわす」ことにあるとさ 本質は、「己を慎み、相手を大切にす 方で、形骸化し堅苦しいものという誤 本来信濃小笠原家に伝わる礼法の

> > らしい活躍の足跡を伝える活動が行わ をはじめ、小笠原家や甲斐源氏のすば

法の師範の方や、小笠原長清公顕彰会

講座や教室も二十年以上の歴史を誇り れています。師範や顕彰会による礼法

平成二五年度からは学校教育にも小

未来へ

れます。

活文化の礎を築いた小笠原家。 武家の指導的立場となり、現在の生

「相手を大切に思う心」の小笠原家

れているのです。

を、未来へと継承する取り組みがなさ ス市の土地に刻まれた甲斐源氏の伝統 笠原流礼法を導入しており、南アルプ

さに誇りといえ、甲斐源氏が「血筋 を大切に育んできたのであるならば が南アルプス市から始まったことはま わがまちは、まちの「地筋」を大切に

が数多く残されています。そのような 育んでいきたいものです。 土地であることを誇りに、 市内には甲斐源氏の活躍を示す史跡



小笠原流礼法体験講座のひとコマ

さぁ、未来へ 私たちが伝える番です。 「相手を大切に思う心」



小笠原流礼法体験講座のひとコマ(立ち居振る舞い)



